

王太子さま、
魔女は乙女が条件です 1

くまだ乙夜

ITSUYA KUMADA



ノーチエ文庫



登場人物
紹介

フィリッポ

フロライユ王国の
国王。

イルベラ

フロライユ王国の王妃。
サフィージャとは
お茶飲み友達。

テュルコワーズ夫人

もと宮廷魔女で、
サフィージャの
有能な侍女。

クァイツ

フロライユ王国の王太子。
夜会で出会った素顔の
サフィージャにひと目惚れするが、
その正体が筆頭魔女だとは
知らず—!?

エルドラン

フロライユ王国の枢機卿。
七年前、サフィージャに
命を救われた。

ベネドット

フロライユ王国の大司教。
サフィージャを
敵視している。

サフィージャ

フロライユ王国の筆頭魔女。
常に仮面をつけて
素顔を隠しており、
「恐怖の魔女」と呼ばれている。

目次

王太子さま、
魔女は乙女が条件です
7

書き下ろし番外編
病の治し方

361

王太子さま、
魔女は乙女が条件です
1

第一章 王太子が現れた

その城は森のすぐそばに建っていた。大小さまざまな塔が林立する、美しい城だ。中庭には迷路のような木立が続き、あずま屋には美術品のような鉄細工てつさいくのベンチとテーブルがすえてある。

季節は冬、社交シーズンの真っ最中だった。

夜会から抜け出したサファイージャは、城の庭をさまよっていた。葉を落とした大木の陰に鉄のベンチを見つけて座る。その途端、金属のひんやりした感触が薄手のドレス越しに伝わり、背筋がぶるりと震えた。襟元をかき合わせながら、とにもかくにも落ち着ける場所があることにほっとした。彼女はひとりきりになりたかったのだ。

「……あーあ。くだらない」

サファイージャはひとり嘆息する。パーティーなんて大嫌いだ。なぜこんな道化どうけのような格好をしなければならぬのか。重たいスカートをひきずり、ドレスの前身頃が美しく

見えるよう何度となく手で直してしずしず歩くことにいったい何の意味があるのか。

「私は魔女だぞ。こんなことをしているひまがあったら薬でも作っていたほうがマシ……」

怒っていたサファイージャだが、次の瞬間、絶句した。何気なく足を組んだ拍子に、ピリりと布地が裂ける音がしたのだ。

おそろおそろ太ももの下に手をやる。ドレスのお尻のあたりに、ベンチの鉄釘が引っかかっていた。スカートを引っ張ると、布地がさらに破れていく感触がして、慌てて手を止める。

「どうしよう……」

最悪だ。立ち上がれなくなってしまった。

無理に布地を引っ張れば、ドレスのお尻に大きな穴を開けてしまうことになる。

「だ、誰か……!」

声を張り上げてみたが、応えてくれるものはいなかった。ひとけのない場所を求めて、こんな風の強い夜に外へと飛び出したのだ。当然といえば当然である。

「情けない……」

涙が出てきた。

常に黒いフードをかぶり、顔を覆う垂れ布と仮面をつけて、人には顔を見せぬ神秘的魔女で通してきた。あまたの毒殺に関わっているとも、国王を裏から操っているともうわさされる『黒死の魔女』が、初めて出た夜会にうまくなじみずじままに敵前逃亡。それだけでも格好悪いのに、ベンチの鉄釘にドレスのお尻を引っかけて立ち往生とは、情けなさも極まれりではないか。

この上下ドレスに大穴を開けてもして、下着が丸見えのみっともない姿で宮廷を歩こうものなら、これまで築き上げてきた妖しく恐ろしい魔女のイメージもガタ落ちだろう。

「楽しい王宮生活だったな……」

サファイージャはポツリとつぶやく。彼女は、宮廷で働く魔女だ。

魔女とは薬を作り、占いをする弱小宗教の女性のことだが、とりわけ宮廷魔女の資格は容姿端麗で成績優秀、さらに社交の才があるものに与えられる。

サファイージャはその地位を得るために、十五歳までひたすら努力を重ねてきた。

そしてついに宮廷魔女の証たる黒ローブを手に入れて、さらに職務に邁進すること六年。

先輩のお局魔女たちに目をつけられぬよう地味にふるまい、王都のならず者貴族たちに手折られぬよう生きてきた。

そうしてようやく押しも押されもせぬ『筆頭魔女』として取り立てられ、つい先日叙任式を済ませたばかり。

お妃さまのおほえもめでたく未来は薔薇色順風満帆、これでようやく『野望』に一歩前進したと喜んだ矢先にこの失態だ。

風が吹きすさぶ。飲酒でほどよくほてった体が一瞬にして冷やされていく。

このまま凍死するのと、穴開きドレスでそそくさ退散するのと、どちらが不名誉だろうか。

そんなことを考えていると、ふいにしげみをかきわける音がした。

「だ、誰か、誰かそちらにおられるか！」

必死に声を張り上げると、木立の奥からすばらしい美男子が顔をのぞかせた。

夜の闇の中でも輝かんばかりの白皙に、抜けるような透明感のある金の髪。どんな女性でも息をのまずにはいられないほど形の整った切れ長の目、彫刻のようにすらりとした手足。カーネリアンに似た緋色の瞳は、かがり火の光を受けて赤々と燃えている。

「クアイツ王太子殿下……」

思わず彼の名前を口走ると、当人は不思議そうな顔をした。

「あなたのような美しい女性にお見知りおきいただいて光栄ですが……初めてお会いす

る顔ですわね」

普段はフードを深くかぶり、顔を覆う垂れ布と仮面をつけて顔を隠しているサファイアだが、さすがに夜会でそのような格好をするわけにもいかない。今は普通の令嬢のようにドレスを着て、素顔をさらしていた。そのためクアイツは誰だか分からなかったようだ。

クアイツは、緑豊かな大地と華やかな宮廷文化を誇る、このフロライユ王国の正統なる王位継承者である。国事などで何度も顔を合わせている相手なので、サファイアが名乗ればクアイツも得心がいくだろうが、それは矜持が許さなかった。

初めて出席した夜会でドレスがまずいことになり、泡を食っている女。それが恐怖の宮廷魔女だなんて知られたら、格好が悪すぎる。ふと、意味ありげにニワトリの心臓を握りつぶす儀式の最中、「あいつこないだ尻丸出しで歩いてたんだぜ」と忍び笑いをもらす貴族連中の姿が目につく。

焦りながらも、サファイアはなんとか返事をした。

「え……ええ」

「ああ、お姿ばかりかお声まで鈴を転がすような美しさだ。お名前をおうかがいしても？ 白百合のような方」

さすがは淑女たちの間で「結婚したい男第一位」と呼ばれる王太子殿下。珍妙な女にも、なんと優しく丁寧に話しかけることか。浮き名の一つも流れない彼は、臣下からの信頼も厚く、いずれ賢王になるだろうと言われている。彼に気に入られるようひそかに画策している連中はかなりの数にのぼる。

そんな人物に弱みをさらしたくない。サファイアは見栄を張りたくないあまり、

「……アインホア……」

と、とっさに偽名を使ってしまった。

「南方の名前ですわね。いったいどちらの？」

「……ええと……ディアルヌ公の親戚筋……ですわ」

声色まで変えて、清楚な乙女を演出する。

「そうですか。南の方にはこの国の風は冷たいかと……さあ、私とともに戻りましょう。どうぞお手をこちらに」

「い、いえ、そんな、結構ですわ……」

「どうしました？ ご遠慮なさらず……」

物やわらかな口調ながら強引な手つきで抱き寄せられて、高価なドレスは甲高い悲鳴を上げて永眠した。絹布の裂けるするどい音が響き、クアイツの顔がさっと青ざめる。

「なんてこと……お詫びしてもきれません。女性の衣服を力任せに裂いてしまうなど……」

クアイツはおのれのせいだと誤解したらしい。

「すぐに代わりのドレスを用意させましょう。さあ、今はこちらをお召しになってください、美しい方」

彼は羽織はつていた上着を脱ぎ、サファイージャの肩に着せかけてくれた。豪華な衣服だ。ちりばめられた刺繡ししゅうや胸に並ぶ勲章でずしりと重い。

「立てますか？ 私の腕をお貸ししましょう……」

「え、ええ……でも……」

着替えを用意させるということは、クアイツと一緒に王宮の回廊を抜けるということだ。誰もが憧れる美形の王太子殿下が衣服の乱れた女を連れて歩けば、人は当然、「あのものは誰か」とささやき交わすだろう。一夜にして注目的になってしまう。その上、侍女や小姓を呼ばれたなら、上を下への大騒ぎになること間違いない。それは大変に都合が悪い。

「結構です。侍女をひとりよこしてくださいればじゅうぶんですわ。わたくしここでお待ちしております」

「なるほど。あなたは、私とうわさになるのを恐れていらっしやる」

「ええ……」

「お美しいだけでなく思慮深いあなたにとって、私とのうわさは不名誉なことでしょうか」

「いいえ、そういうわけでは」

サファイージャははっとした。いらぬことを言って、クアイツのプライドを刺激してしまったようだ。誰もが愛し、かしづく彼にとって、女のほうから拒絶されるのは屈辱くつじやくだろう。

「わたくし、王太子殿下とはとても釣り合いの取れぬ身ですもの……殿下とご一緒におりましたら、嫉妬しとで淑女しよきゆうの皆さま方に呪い殺されてしまいます」

とっさに取りつくろうと、クアイツはくすりと笑った。彼のことはそれなりに見知っている。世辞は嫌いでない性質たちだ。むしろ無粋ぶすいなものや愚直ぐちくなものを厭いとう。

「それにわたくしも、殿下とこれ以上一緒におりましたら、苦しくなってしまうのだって、こ、恋に落ちてしまいうそなんですもの」

あれ、どもった。なんでだろ。

どうも彼の前だと調子が狂う。

宮廷では、魔女は男に言い寄られても如才なく立ち回ることがマナーとされている。基本的には上手にかわすべきなのだが、平民出の宮廷魔女にとって、貴族との婚姻は憧れだ。さっさといいところのお坊ちゃんを捕まえて魔女をやめてしまうものがあとを絶たないため、魔女の平均年齢は驚くほど若い。

十五の歳から出仕して、二十一になった今でも職務ひとすじな魔女は、サファイージャくらいのものだった。

「恐怖の魔女」と呼ばれる前は、あまたの貴族の誘惑をかわしてきたサファイージャだ。そんな彼女の舌先三寸に、王太子殿下は目を細めた。

「……あなたが私と同じ想いでいると知って、この心臓は壊れそうなほど高鳴っています」

情熱的なセリフが耳元でささやかれた。このくらいはまったく珍しいことではない。今までにも何度となく男に言い寄られ、そのつど何気ない調子を装って拒否してきた。

「暗がりにはひとり佇むあなたを見て、初めは亡霊かとわが目を疑いました。なにせ、あなたの肌は夜の闇の中でも輝くように白く、この世のものとは思えないほど美しかったから」

いつものお世辞、いつもの退屈な貴族のお遊び……そう自分に言い聞かせながら、サ

ファイージャは唇を囁んだ。優美を体現したかのような彼だが、そのど元は意外なほど男性らしかった。サファイージャはそれをどこかうっとりとした気持ちで見つめる。

「この作り物のように愛らしい唇に、確かに血が通っているのだと実感させてはいただけませんか？ でないと私は、いもしない亡霊の夢を見ているみたいで落ち着かないのです」

クアイツの筋張った指がサファイージャの唇をなぞる。

「……温かい」

クアイツはため息をついて手を離し、いとおしげに、サファイージャの唇をなぞった指先へキスをした。

ゾクリと肌があわ立つのをこらえて、サファイージャは必死に平静を装った。

宮廷における男女の作法に従い、拒絶するときの合図を送る。頬に指を三本立てるのが、『今はダメ』という意思表示だ。

「……お許しください、殿下……」

クアイツは静かにこちらを見下ろしている。うつむきがちな彼のカーネリアンレッドの瞳が、面白がるように燃えていた。

「わたくしには操を立てるべき方がおります」

彼の誘いをおかすため、サファイージャは口からでまかせを言った。
 宮廷魔女は生娘でなければ務まらない。サファイージャは宮廷の筆頭魔女という地位に
 身も心もささげているため、あながち間違いいではないのかもしれない。

「……侍女をあなたのところへ向かわせましょう」

そう告げると、クアイツは身をひるがえした。

——助かった。なんとか窮地を切り抜けたようだ。

サファイージャは冷たい夜風にぶるりと身を震わせながら、上着のあわせをかき寄せた。
 クアイツがつけていた、新緑に似たさわやかな香水がふわりとあたりを満たす。

美しい指先が自身の唇をなぞった感触を思い出し、サファイージャは少しだけ残念にも
 思った。

「本当に、惚れ惚れするような男」

あれは女を破滅させるたぐいの美しさだ。彼に愛されたいと願うあまり、すべてをさ
 げて尽くそうとする女性があとを絶たない——そんな人相をしている。

ドキッとしたり、一瞬、本当に恋に落ちそうになった。

「……まだドキドキ言ってる」

魔性の紅い瞳を間近で見つめたなごりが、サファイージャの心臓のあたりに残っていた。

侍女に案内された客間には、先客がいた。

マホガニーのテーブルに置かれた燭台が、男の顔を浮かび上がらせる。

「……王太子さま……」

待ち伏せされていたのか。でも、なぜ？ 王太子は女遊びをしないことで有名だ。さ
 きほどサファイージャが庭で受けたような世辞を絶やさないので、国中の乙女が彼に憧れ
 ているが、誰とも深い関係にはなっていないはず。

妃をめぐらず、女官もつけず、華やかな令嬢の出入りする社交界には深入りせず——
 と、一切女性を寄せつけずに過ごしてきた方である。

「無粋なまねをすとお思いでしょうね」

「いえ……驚いてしまって。王太子さまは、女性がお嫌いなのかと思っていたものです
 から」

「まさか。そんなことはないよ」

「でも、恋人をお作りになったことのない王太子さまが、どういうお心変わりでいらっ
 しゃるのかしら」

王太子は、乙女を籠絡する吸血鬼のような顔で薄く笑った。

「どういうわけか、あなたは私のことをよくご存じのようだ。ディアルヌ公の親戚筋のお嬢さん？」

ぎくりとした。偽名であることがばれたのだろうか。

「私はあなたを一度もお見かけしたことがありません。ですが、昨日今日初めて社交界に出てきたにしては、ずいぶん垢抜けていらっしやると感じましたものですから。あなたのことがもっと知りたくて、いそぎ、招待客のリストからあなたの名を探せました。するとどうだろう、どこにもアインホアなどという名前はない。名を偽り、あなたは何をなさろうとしているのかと、疑問を抱いたのです」

サファイージャの嫌な予感的中した。偽名であることが早々にばれてしまっている。どうしよう、とサファイージャは焦りながら考えた。

初めて出た夜会であぶれてしまい、ドレスもダメにしてしまった。

恐怖の魔女だというのに、そんな残念な状態なのが格好悪くて嘘をつきました、などはとても言えない雰囲気になってきた。

窮地を切り抜ける言い訳を必死に練っていると、暖炉からすきま風が吹き込み、王太子の背後でろうそくがいくつか消えた。

闇を増した空間に、クアイツの緋色の瞳が光る。

その構図があまりにも似合いすぎていて、サファイージャは言葉を失った。

「宮廷のマナーも心得ておいでのあなただ。すでにどなたかのものになっているのでしょう。お相手は高名な貴族の方。あなたはその方に操を立てたくて、私を袖にした。違いますか？」

「いえ……ええ」

よかつた。なんだかよく分からないけど誤解してくれている。正体を怪しまれてはいるようだが、バレているわけではないらしい。

ひとまず話を合わせておいて、すきを見て逃げてしまおう。

「あなたの夫君が心からうらやましい。こんな気持ちは生まれて初めてです。聡明であるわしいあなたにそこまで思われているなんて……なぜその相手は私ではないのでしょうか？」

なんだかひとりで盛り上がるクアイツ。サファイージャは後ずさりながら必死にツッコミを我慢した。

なぜもなにも、そんな相手なんていませんがな。

「ああ、その唇が火のように熱いことなど知らないままでした。あなたとの道ならぬ恋に燃え上がった哀れな男をどうかお笑ください。そして救ってはいただけませ

んか」

王太子に手を握られる。サファイージャはその手に思わず見とれてしまった。

美しい男とは指の先まで美しいのか。すらりと長く整った指をしているが、関節は男らしく骨ばっている。

この汚れたところのないびかびかの爪の先で唇をなぞられていたのか……と思うと、なぜか胸が高鳴った。

「……指が冷たくなっていますね。暖炉のそばにいらっしやいませんか。毛布をお貸ししますよ」

サファイージャは迷ったが、暖かい火の気配には勝てなかった。

さきほどから寒さが限界で、がちがちに震えていたのだ。おしゃれな薄手のドレスは冬に向いていない。

毛布をふわりと着せかけられ、背中から抱き締められた。わーい、あつたかくてきーもちいー。

って、ダメじゃないか！

しかし今のやりとりでようやく話が見えてきた。要はサファイージャを既婚だと勘違いし、その上、不倫をしませんかと誘っているのだろう。

「王太子さま……いけませんわ」

「こうしませんか。あなたはインホアで、この部屋にはあなたひとりしかいなかった。誰も私の姿は見えていない。あなたは誰にも会わなかった……ただ、一夜の夢を見る。甘い天国の夢です」

「こ、こまりま……んンツ……」

初キスだと騒ぐひまもなかった。ぶちゅつとやられてちゅーつと吸われる。背中がゾクゾクして、サファイージャはその場で倒れそうになった。

熱い唇が強く押しつけられ、小鳥のように何度もついまれる。

「ん……、……ゆるし、……くださ……っ、んん、んんっ……」

さんさん唇を犯されたあとによりやく解放されると、サファイージャは少し涙目になっていた。

胸の中で悔しさと混乱が嵐のように吹き荒れる。

——か、堅物王子かたぶつのくせに、なんつうキスをするんだ！

うっかりちよつと感じてしまったではないか。腰が抜けるかと思った。

「なんてうぶな反応をなさるんですか、あなたは……ますます離したくなくなってきました」

クアイツは熱くささやいて、サファイージャの唇をふたたびふさいだ。舌がゆっくりと差し入れられる。サファイージャの口の中に、ヌルリとした舌の感触が広がっていく。執拗しつように口の中をむさぼられるうちに、じわりと下腹部が濡ぬれてくるのを感じた。サファイージャはくたりと体の力を抜く。

「困ります……」

本当に困るのだ。宮廷魔女は生娘きむすめでないといけない、という規律がある。

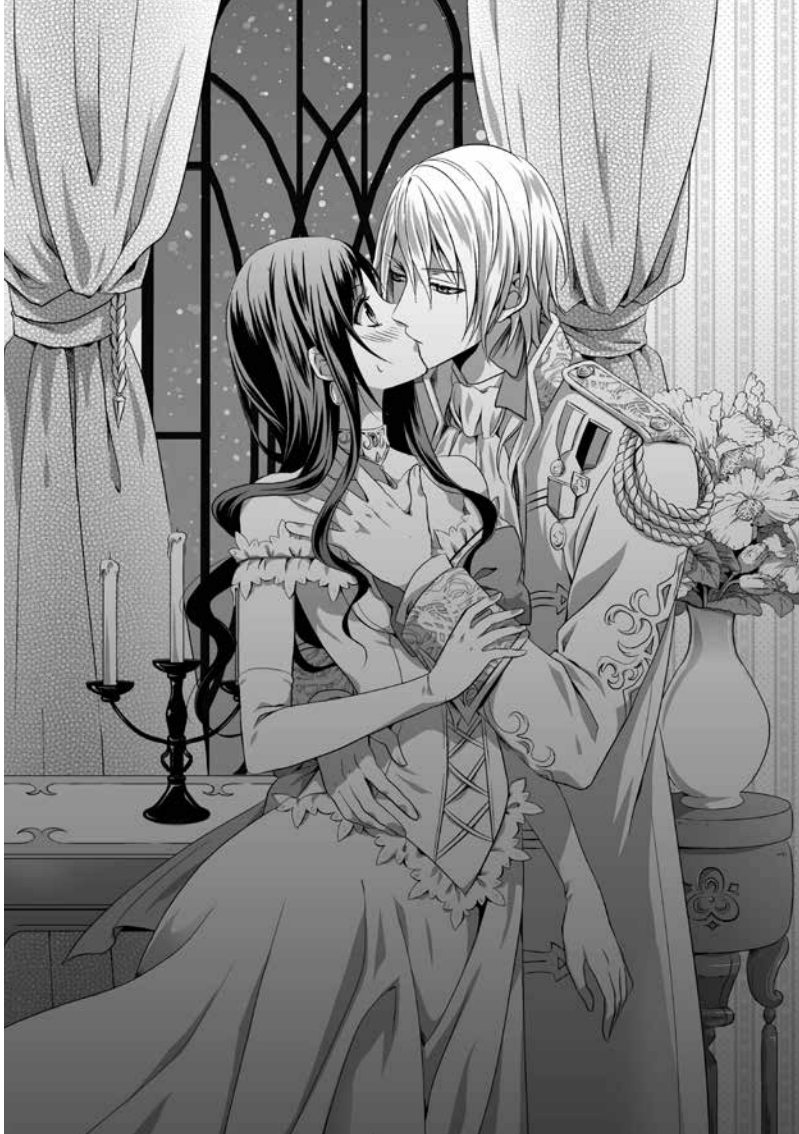
といっても、実際に契ちぎりを交わすことを禁じているわけではない。宮廷魔女は若い娘が多いので、風紀を乱すな、もしくは何かと対立している教会に付け入るすきを見せるな、という意味だが、筆頭魔女である自分が率先して規律を破るのはどうなのか。

劇薬を扱い、他人の命を預かる魔女は、偏見の目を向けられることもある。処女性をうるさく追及し、異端だなんだと取り締まりをしたがる過激な団体もある。何かの拍子にサファイージャが生娘でないとバレれば、窮地きゆうちに立たされることになる。

「わたくしはほかの方を真実愛しております……」

なおもそう言ったが、王太子はあきらめなかった。

「あなたは義理堅くて、けなげな方だ。そんなあなたの様子を見ると、ますます焦こがれてしまいます。どうにかして手に入れたと思うってしまう……」



強引な男め。しかし、嫌味がなく格好いいから始末に終えない。クアイツの、いかにも真剣そのものといった訴えを聞いてみると、なんだか妙な気持ちになってくる。

サファイジャは星占いも行っている。ときには政治的な助言を乞われることもあるし、自然と様々な人間の秘密に触れてしまう。これまでにも、一見清楚な令嬢から墮胎の相談を持ちかけられたり、理想の君主と人々にあがめられる男から、趣味の人殺しをやめたいという相談を受けたりしてきた。だからもうどんな人間にも幻想を抱かないつもりだったが、クアイツだけは別だった。

こいつ、じつは遊び人だったのか？ と、サファイジャは裏切られた気持ちで考えた。王太子のプライベートについてもよく知っていると思っていた。どこから見ても疑いようのないくらい清廉潔白な男だ。抱かれない男第一位ながら女にうつつを抜かさないところは好ましかった。きつと純情で義理堅い男なのだろう……そんな男が貴族たちを引つ張ってくれるのなら、腐りきったこの国も少しはマシになると期待していた。

ひよつとして、このいかにも誠実そうな態度は演技なのだろうかという不安が胸をかすめる。恋愛経験のないサファイジャには、彼の振る舞いがとても遊び慣れているように見えてしまったのだ。

「……王太子さま、王太子さまのお慈悲に免じて、わたくしを見逃してください……この身をこれ以上お求めになるのでしたら、わたくしは……」

「どうぞお好きな言葉で私を鞭打ってください……私はもう、あなたを手に入れることしか考えられない……」

サファイジャは深刻に焦り始めていた。息がかかるほど近くにクアイツの温かい体があつて、力強く抱き締められている。みがき上げられた象牙のような肌に、珊瑚にも似た厚い唇。女なら絶対に見とれてしまう男だ。ただ近くにいただけでクラクラするほど扇情的なのに、耳元で愛をささやかれていると、頭がおかしくなりそうだった。

背中をまさぐる指がコルセットの紐に触れ、不慣れた手つきでそれを引き抜いていく。そのぎこちなさに違和感を覚えたが、深く考える余裕はなかった。

あつという間にドレスの胸元を引き下げられ、胸があらわになった。

「かわいらしい蕾だ……こんなに硬くなっている」

白い丸みのつべんで、赤い突起がツンと上を向いていた。

や、やめろ、そんなところをいじるなっ。

「本当に……、もうやめ……」

後ろから胸をわしづかみにされ、突起を指の腹でもてあそばされる。誰にも触らせたこ

となんてないのに。

クアイツは、こうやって色んな女を抱いてきたんだろうか。

ゾクリと背筋からかけ上がったのは、おぞましさだ。そうだ、自分はこんな愛のない接触で感じてなどいない。

しかし、うなじや耳にキスをいくつも降らされて、サファイージャは一瞬気が遠くなった。「ひ、人を呼びますよ……!」

思い余って叫んだ唇を、苦笑するクアイツにふさがれる。

「ふ……くっ……うっ……んあ……」

唇を甘噛みされながら胸をいじくり回されて、息もできない。

「かわいい人だ、あなたは。私が誰だかお忘れですか？ この国の王子ですよ。こんなところを目撃されて困るのはあなたと……あなたの夫君だ」

それもそうだ。筆頭魔女が王子といちゃついているところなど見つかったらおしまいである。確実にクビだろう。クビで済めばまだいい。最悪、王子を誘惑した罪で教会に難癖をつけられ、異端審問。そうなれば火刑台行きは確実だ。

ざあつと血の気が引いていく。なんとかして切り抜けないと。考えろ、考えるんだ、黒死の魔女!

ぐるぐると頭を回転させているサファイージャをよそに、クアイツの手は、慈しむように体を撫で回している。少しずつ上半身が裸にされていく。

背中からドレスが脱がされて、あらわになった背骨にくちづけをされた。びくんと大げさに跳ねてしまったのは驚いたからだ。断じて気持ちよかつたわけではない。

こつりと歯を当てられて、ぞくぞくと背中がのけぞった。

「ん……ッ、く、う……!」

声もが漏れそうになるのをこらえ、必死に頭を働かせる。いつそ魔女だとカミングアウトするのはどうだ？ 名を明かせないと断りを入れたら、いくら王太子といえど無体な真似は……

……いや、ダメだろう、それは。今日の夜会に招待されている魔女の数なんて、たかが知れている。リストをたどったらいずれ正体もバレるに違いない。

「何を考えているのですか？」

集中していないのが伝わったらしく、クアイツの紅い瞳あかにらみつけられた。甘い目尻がつり上がり、人相が微妙に変わる。そんな顔つきも似合っているのだから、色男は得だ。

「あなたの瞳はまるで硝子のようだがらす。ひどく美しいのに、私を映すだけで見てはくれな

い……」

切なげな声でささやかれた。

なんて口のうまい男なんだ。思わず胸がうずいてしまったじゃないか。演技でこんな声が出せるなら、いい役者になれる。

「この胸も……こんな温かいのに、あなたはひどくつれない」

妙に熱い手のひらが、やわやわと胸を揉みしだく。軽い力でてっぺんを弾かれ、肩がビクリとした。

気持ちがいいだなんて絶対嘘だ。

認めたくなんてないのに、知らず知らずのうちに下半身がむずがゆくなっていく。

「だって……愛してもいない殿方とのたとなんて……嫌に決まっていますわ……もう、触らなくてくださいな……」

そう言うものの、指先で軽く胸をこすられると、強がることができなくなっていく。

やっぱりちよつと気持ちいいかも。

ぷっくりと肥大した先端を何度も指で転がされ、浅い吐息がこぼれ出る。はっはつと不規則に息をつくサファイージャを、クアイツは目を細めて見つめた。まるで視線で犯されているみたいだ。

「嫌だと言いながら、そんな誘うような顔つきを男に見せるんですね……ご自分で分かりませんか？ あなたは今、ひどくいやらしい目で私を見つめている……そんな目をするあなたが嫌がつているはずがない。ほら……」

「う……」

体を横に動かされ、鏡を見せられる。そこに映った自分の顔は、信じられないほどだらしなかった。

「いや……」

「目を閉じないで……きちんと見てください。きれいな顔が赤らんで……涙が浮かんでいる。ひどく男を誘う顔つきだ……私はもう我慢ができなくなりそうです」

目を閉じててもクアイツの声からは逃れられない。執拗しように吹き込まれるみだらな言葉が辛かった。

魔女と呼ばれて恐れられていても、恋愛経験はない。そこは世間の乙女相応に、傷ついたり恥ずかしかったりするのだ。

信じられないことに、いつの間にかサファイージャは追いつめられ、泣きそうになっていた。

クアイツの唇が、肩のあたりを歩き来する。肌に触れるか触れないかのところをたど

られて、腰が思わず浮き上がる。腰の下に手のひらが差し込まれた。太ももからお尻にかけて、ぐにぐにと揉みつぶされる。

「や……、やめ……、怖……ひゃあっ！」

腰が引けているサファイージャにはお構いなしで、クアイツはドレスのスカートをまくり上げた。

足、あしが見える！ やめて！ やめろったら！

サファイージャはとっさに自分の口を手でふさいだ。もう少して罵声ばせいが出るところだった。

恐怖の叫び声を無理やり抑え込む姿は、どう見ても生娘きむすめの反応でしかないはずだが、クアイツは気がつかないのだろうか？

「可憐かれんに恥じらうふりをして……あなたは本当に誘い上手ですね。うっかり引き込まれてしまいそうになる」

あー。分かってなかったかー。そんな気はしてたー。

サファイージャはもうやけくそになって、ぶんぶんと首を横に振った。

口を開いたら、情けない涙声で取り乱してしまふ気がして怖かった。

傷つき混乱するサファイージャの気持ちなどお構いなしに、クアイツはとろけそうな甘い笑みを浮かべている。

「やっぱり……すごく濡ぬれてる。ほら……」

下腹部のさらに下にある裂け目を硬い指がこすり上げた。粘り気のある甘い感触が、おなかの中心に向かってかけ上がる。

一番人に触れられたくない部分を無遠慮あほに暴かれた恥ずかしさで、サファイージャのどをつまらせた。

「……や……、やめて……」

誰たれだお前。

涙声で懇願こんがんしている自分に、自分で突っ込んだ。情けない。これがあの黒死こくしの魔女か？ こんな姿、絶対に他人には見せられない。

硬い指が少しずつ押し入れられる。これまでに味わったことのない異物感に、また泣きそうになった。

太い指が中でできこちなく動き、やわらかいひだをかき回す。

「ひ……んん……」

中をこする生々しい感触に、得体の知れない心地よさが入り混じる。

こんなこと絶対にありえないと思っっているのに、なぜか中がひくついてきて、めちゃくちゃにかき回されたくなくなってくる。

「あ……だめ……く、う、う……んんっ……！」

粘膜のやわらかい内壁をこすり上げられて、くうんと子犬のように鼻が鳴った。

「な、んか……だ、だめ……あつ、や、やあつ……！」

「声色が変わりましたね……ここをこうされるのが好きなんですか？」

男の硬い指がちゅぶちゅぶと音を立てながら上下した。ひどくじれったい感覚が突き上げる。

「や、あ、ああ……あう、ううううっ……！」

やめて、そんなところ、自分でもいじったことないのに！

そう言って頭のひとつもひっぱたいやりたかったが、行動に移したら、確実に不敬罪でお役御免だ。

男の吐息が首筋にかかる。熱く弾んだ彼の呼吸がくすぐったくてたまらない。

なんとかしないと！ 王太子さまの機嫌を損ねず、あとをにごさず、やんわり感じよく断る方法を考えるんだ。

思考を集中させようとしても、体のほうに意識がいつてしまう。さきほどからいじられていた部分が熱くてたまらない。勝手に腰が動いてしまう。「気持ちいいですか？ あなたは感じるのが上手な方ですね……そんなに腰を押しつけてこられると、私も辛いのですが……」

さきほどから、硬いものがお尻に当たっている。快感で体が跳ねるたびにぐいぐい食い込んできてちよつと怖い。

「お……、押しつけて、なんか……」

弱々しく否定すると、それがクアイツを刺激したらしく、さらに指を一本増やされた。すさまじい圧迫感で頭が真っ白になる。策略を巡らせることなどできそうにない。

ぐちゅぐちゅと裂け目を指で犯され、強烈な快感が背筋をかけのぼる。

「あ、あつ、はあつ、あん、んん……」

中で指が暴れるたびに声が跳ねた。

何あえいでるんだ気持ち悪い！

自分で自分に鳥肌を立てつつ、でもやっぱりこらえきれない嬌声きょうせいが勝手にのどの奥からあふれ出て、サファイージャは困惑した。

激しく抜き差しされる指先が、感じるところをかすめていく。その感触にとろとろと溶けてしまいうさだ。

「麻薬のような声だ……あなたは私の心をかき乱す。もっと聞かせてください……私を受け入れてくださるところですから、きちんと整えてさしあげたいのです」

う……受け入れる、だつて？
相変わらずお尻には硬いものが押しつけられている。その上、それはちょっと動いているのだ。

クアイツも必死に抑えているが、どうしても止まらないのだろう。

これを受け入れるのか。サファイージャはிரらない想像をしてしまい、ぶるぶると体を震わせた。

きつと痛いだろう。指二本でもかなり辛いことから。

でも、こんな大きなものをゆっくり動かせたら……

想像だけでおなかの底がきゅんとうずいた。

「あああつ……！ は、はあつ、だ、だめエ……！」

「……ッ、急に締めまりましたね。熱くてやわらかくて……溶けそうです」

やめろ、考えるな！

硬いものが尾骶骨のあたりをぐりぐりと刺激する。

クアイツから色つぼいたため息が聞こえてきて卒倒しそうになった。

他人の欲望をあからさまに見せつけられているようで落ち着かない。

ものほしそうに押しつけられるクアイツの下腹部から必死に気をそらそうとした。

でも。おおい……

クアイツは生ける彫刻のような男だ。生氣などまるで感じさせないのに、そこは生々しい熱を帯びている。いったいどんな形状をしているのだろう。よこしまな想像が先走り、知らず知らずのうちに口内につぼがあふれた。

こくりと嚙下した音に気づかれたらしく、耳元でくすりと笑われる。

その艶つぼさに、ゾクリと体がわなないた。

「ああ……あなたのこの体を夫君が独占しているかと思うとやりきれない。全部私だけのものにしてしまいたい……」

甘い嫉妬まじりのささやきに、サファイージャは激しく身悶えた。

こ、この男は危険だ。うっかり愛されているような気分させられたじゃないか。

「ひと目見た瞬間に、あなたが特別な女性だと分かりました。私は生まれながらに何もかも与えられてきた……だからこそ、誰かを選ぶ気にはならなかったのです。愛してほしくない女性を抱くことなんて考えられなかった。誰かをほしいと感じたことだつてなかった……」

甘いセリフとともに、乳首を弾かれる。

ひどく感じる突起をくにくいと揉みつぶされて、全身がビクンと震えた。

「そんなの……嘘ですわ……、はあんっ……」

だまされないぞ、男は皆そう言うんだ。被害妄想でじわりと涙を浮かべつつ訴える。全身の毛を逆立てる猫のように、キツとにらみつけた。

「信じていただけないのも無理はない。しかし、とにかく初めてなのです、こんな気持ち……胸が張り裂けそうなほど、激しい想いは……」

クァイツは赤く色づいている先端をきゅつと強くつまみ上げた。

「んあ、はあっ、ああっ……！」

体が斜めに大きく傾き、クァイツに首筋をさらしてしまふ。

クァイツの熱い舌が首筋を熱心に舐め上げた。髪に顔をうずめ、幸福そうにため息をつく。

「私の愛しい人……できるなら、誰よりも早くあなたと出会いたかった。恋を知ったその日に、永遠に叶わぬと思いきや知らされた私の気持ち、あなたに分かるでしょうか。せめて体だけでも奪いたいと願ってやまない、この身勝手な思いが」

本当に身勝手ですわねッ！

「……ひどい人……体を奪ったって、わたくしの気持ちまでは奪えませんわ……」

ようやく筆頭魔女になれたんだ。長い間の夢だったんだ。

こんなところでクァイツと親密すぎる体のお付き合いをしては、今後の行動にも差しさわりが出る。何かのきっかけで素顔が露見したら、その時点で魔女としてはおしまいだ。

王太子としても、自分が気まぐれに手をつけた娘をそばに置いておきたくはないだろう。適当な理由をつけて放逐するに決まっている。

考えている間にも、指先が無慈悲にうごめいて、下半身をびりびりとしびれさせた。こんな感覚は生まれて初めてだ。これまで奥深くに何かを挿入したことなどなかった。奇妙な感覚がおなかを圧迫する。

「んん……っ、……見逃してくださいまし……ほかのものならなんでもさしあげますわ。でも体だけは……どうか触れることだけはおやめください……」

なんのひねりもない懇願が口をつく。もう必死だった。涙が流れて息もたえええ、胸は苦しいし頭は真っ白。なのに、触れられると魚のように腰が跳ねてしまふ。

「おかしなことをおっしゃいますね。私に手に入らないものなどありませんよ」
ですよねー。知ってた。

彼ははいっぱいはいっぱいのサファイージャを見て、満足げに笑う。

わがもの顔でサファイージャの耳をついばみ、いたぶるような調子でささやいた。「もう思考がまとまらなくなってきましたか? ……舌つたらずあなたも私の好みです」

ううっ、喜ばせてどうする。もっとしつかりしゃべらないと。こらえ性のない口を必死にふさいで、首を横に振る。

「んっ……、……ッ、……くあっ……」

努力もむなしく、あっという間に悲鳴が漏れ出る。

キスで唇をびったりふさがれながら、ゆるゆると裂け目に指を出し入れされ、我慢が限界にきてしまった。やわらかい舌に口内をかき回され、まざりあつた唾液が垂れる。

もうろうとした意識を引き裂くようなすんどい快感。断続的に背骨が震えて、力が抜けた。

「なんてやわらかい体なんだ。あなたはどこもかしこも砂糖菓子のようにですね。乱暴にしたら、壊れてなくなってしまうそうだ……」

容赦なく穴をほぐしにかかっておいて、何を言ってるんだこいつは。

サファイージャは悔しまぎれにクアイツの横っ面を張ってやりたい気持ちになった。すんでのとこで踏みとどまれたのは、それ以上に自分を殴りたい気持ちだったからだ。

だいたいな、こんな指をどっぷりと呑み込んだ状態まで持ち込まれといて、嫌だと主張しても説得力がないんじゃないか。

「ふ……っ、……んん……んんう、うううっ……!」

中をゆすられるたびに媚びたような鼻声が漏れて、視界がぐにやりと狭くなる。ち、違う。感じているわけではない。酔っているのだ。ワインが悪かったんだ。

気持ちとは裏腹に、体が勝手にほてっていくのがおかしかった。まったく抵抗ができていないことも、サファイージャのプライドを粉々にした。自分はこんな、抑制がきかなくなるような愚かな人間ではないのに。

「どんどん濡れてきますね。夫君はこんな甘いものを毎日味わっているのか……」

あざけり半分、嫉妬半分の擲諭を吐いて、いらだたしげに肩口に噛みつく王太子。

少し腹を立てたふうの動きが、サファイージャの胸をぎゅっつと締め付ける。とろりと酔わされかけて、サファイージャはハッとしたり。

何を切なくなっているんだ、正気を取り戻せ!

泣く子も黙る魔女が、低級の動物霊に取り憑かれたような有様だなんて。

「ああ……あなたは素直に体を預けてくださるのに、あなたの愛はこんなにも遠い。私だって、本当はこんなことをしてあなたをはずかしめたくはなかった……」

ならやめてくれ。今すぐ、即刻、すみやかに！
突っ込みつつ、何かが引つかかった。

ん？ 愛？ そ、それだー！

愛の証を立てろ、と無茶振りするのはどうだろう。

大事にするのが愛だと、とにかく良心に訴えかけるしかない。私を愛しているならこんなことはやめてと、はっきりきっぱり言ってやれ！

「ほっ……本当に、わたくしを、あ……愛して……らっしやいっ……、ますか？ 神に誓って？」

むね、胸をいじらないでほしい。人がしゃべっているのに。

「神にかけてあなたを愛しています」

そう言わせるように仕向けたはずなのに、実際に言われると、なぜか胸がざわめいた。サファイージャはそんな自分に不安を抱く。や、安い。ちよつと安すぎるんじゃないか。

そんなに男に飢えているのか？ しつかりしろ、正気を保て！

「でしたら……っ、わたくしを、妃……迎えてくださいますか？」

「もちろんです」

即答かー！

少しは迷ったり悩んだりしろー！

彼の妃の地位はもちろんお安くはない。平民ふぜいはお呼びでないのだ。

「んんっ……、信じられ、ません、わ……わたくしの……本当の姿も知らないくせに……」

そもそもサファイージャは貴族でもなんでもない。自分の正体があの黒死の魔女だと知られたら、クァイツに失望されるのではないだろうか。あんなかわいげのない下賤の娘など願ひ下げだとはかりに輕蔑を込めた目で見られでもしたら、立ち直れないかもしれない。

「つれないことをおっしゃいますね。名前も教えてくれないあなたに責められるいわれはありませんよ。もつとも、あなたが何者であろうとも、私の想いに変わりはありませんが」

「あなたは……愛する女性、に、こんなっ、……無体をなさっ……、るの……？ ひあ、ああっ……！」

立てた指で乳首をひねり上げられた。ふるふると震える胸のてっぺんをぐりぐりと刺激され、最後まで言えずに嘔んでしまった。

「あなたが誘ったのではありませんか。あなたがどうしても嫌がるようなら、私だって無茶はしなかった。あなたがいけないんですよ。恥じらうふりをして私を焚きつけるか

ら……」

ええい、ふりじゃなくて本気で恥じらってるんだ。少しは分かれ！

「わ、たくしを愛して、いらっしやる、の、なら……、どうか、どうかこの場は、お収めになって、くださいまし……っ」

「そうですね……」

彼は考えるようにつぶやいた。

しつこくいじくり回していた手が、胸から離れた。

下からもゆっくりと指が引き抜かれる。

さびしいような感覚におそわれ、サファイージャはおののいた。

違う、違うんだ、嫌がってるのは口だけとかそういうんじゃない！

急に解放されて、サファイージャは思わずクアイツを振り返る。

納得してくれた……？

ほやけた頭で、クアイツがベストやシャツを脱いでいくのを見守っていたが、荒い息

が収まるにつれ、青くなった。

全然人の話を聞いてないだけだったー！

や、やられる。

クアイツの気まぐれのせいと、せっかくの将来設計が台無しになってしまふ。

もう感じよくとか言ってる場合じゃない。殴り倒してでも逃げないと！

サファイージャはよろめきつつも立ち上がる。コルセットが乱れてぐちゃぐちゃだった
が、そんなことに構っているひまはない。脱げかけている服をかき抱き、サファイージャ
はふらふらと逃げ出した。

だが、やわらかいじゅうたんと履きなれないヒール、それに力の入らない足が邪魔を
して、いくらも行かないうちによるめいた。

「あっ……！」

どさりと転倒した体に、クアイツの影がかぶさる。

「……お……お許しを……」

かたかたと体が震えた。

「女性をしたげの趣味はありませんが……あなたの悲鳴は、なぜか私の心をざわめか
せますね。抵抗しても無駄ですよと言ってさしあげたくありません」

慈愛のような、恥じらいのような、なんともいえないやさしげな笑みで見下ろされる。
ぞっとした。

最大派閥の後ろ盾を持つ魔女として、もう怖いものなど何もないと思っていた。しか

し、それは思い上がりだったのかもしれない。
 ここから逃げ出せるなら、魔女の地位なんて捨ててしまっても構わない。そう思ってしまうほど、目の前の男が怖かった。

本名がのどまで出かかる。

声にならずに消えたのは、あきらめきれない夢があるからだ。
 疫病をこの世から駆逐する。

その『野望』のためにはどんなことだってすると誓った。誇りはまだ消えていない。
 こ、こんなやつに、こんなやつに屈してたまるか！

「ち……近づかないでくださいませ。それ以上わたくしにお手を触れるのでしたらお覚悟を。わたくしには自害の用意がございませ」

スカートの内側に、毒を隠し持っていた。鉾物から取れる劇薬だ。大量に服用すると、疫病のような症状が出る。普通の人間には、疫病かそうでないのか、症状の見分けがつかない。

もちろん、単なるこけおどしで、本当に飲むような勇氣などなかったが、クァイツを動揺させるにはじゅうぶんだろう。

「あなたという人は……」

クァイツが瞳をかげらせる。

「ますます私のものになりました。……もどかしいものです。あなたの素晴らしさを見せつけられるごとに、あなたは私から遠ざかっていく」

「殿下は公正な方ですわ。わたくしはそれをよく存じております。神の恩寵たる王太子さまに申し上げます。わたくしは正しい結婚を望んでいるのです」

女にここまで言わせてもまだ強要するのなら、心からその女を愛してはいないということだ。

ところが彼はいささかもひるまなかった。

「あなたの言う『正しい結婚』とは？」

「えっ……」

「夫君にしかるべき地位を授けてほしいということですか？」

王太子の愛妾になるかわりに、サファイージャの夫には褒賞を与える——つまり彼は、サファイージャが見返りを期待していると思っただのだ。愛する夫へのせめてもの罪滅ぼしに。あるいは王太子の寵を受けることで、夫を助けるために。それでサファイージャが言ひなりになるなら、そうしてもいいと考えたのだろう。

ふざけるな、と言いたかった。なぜわざわざ愛人をやらねばならないんだ。今はこん

な姿でも、魔女の証たる黒いローブさえ身にまとうていれば、クアイツとだって対等に渡り合えるのに！

「ただひとりの妻でなければ、いやだ……嫌でございます。よそに愛人を持つようなやつも願ひ下げ……ですわ」

逆上のあまり少し地が出てしまった。

翻弄ほんろうされっぱなしなのが悔しい。せめて一矢報いしむくいてやりたかった。

「私は構いませんが……それならあなたの夫君はどうなるのです？ 手段を選ばずに別れさせてしまってもいいのですか？ 愛する人と離ればなれにされて、あなたは耐えられるのですか？」

「……へ？」

なんでそんなことを聞くのか。まるで本気でサファイージャと結婚する方法を模索しているように聞こえる。……いや、まさか？

「つまり……あなたを正妃にお迎えもしますし……時々はおあなたの元ご主人に会わせてさしあげても……いえ。今のは聞かなかったことにしてください。そんなこと、私が耐えられない。でも、ああ……あなたがどうしてもおっしゃるのなら、どうか私をうまくだましてください。どんなに私が疑っても、最後までそんな関係は一度もなかった

と……」

「……お、王太子さま？」

もしかしてお酒でも飲んでいるのだろうかと思いつつ、さんざん重ねた唇の味を思い出して、いや素面しらふだよな、と心の中で否定した。

誰が実際に妃の座にすえろと言った。

これだけ力いっぱい断っているのに、なんでそういう話になるんだ！

ぽかんとクアイツを見上げると、彼の乱れた衣服が目についた。クラヴァットが抜かれ、豪華絢爛ごうかけんらんなベストのボタンがなかばまで外されて、胸元だけが露出している。どうか、近い。鎖骨のくぼみやしっかりとした胸筋が見分けられるほどだ。

なんてきれいな男なんだろう。宮廷で顔を合わせるたびに、無邪気にそう思っていた。「とにかく、遊びや気まぐれではないですから」

につこりと微笑まれても、サファイージャは呆然とするだけだった。心臓だけがやたらに速く脈打っている。

憧れがなかったわけではない。一度でいいからダンスを申し込まれてみたいと思っただけのこともある。そのクアイツが、遊びや気まぐれではなく、サファイージャを妃に迎えたいという。

……って、そんなわけあるか。本気にしてどうする！

サファイジャは、喜んでしまいそうになる自分を精一杯抑えつけた。

胸が苦しくてたまらない。

ただの気まぐれで適当なことを言われているとしか思えないのに、なぜか素直に受け入れてしまいそうな自分が情けなかった。

もろ肌を脱いだ肩に冷気がしみる。震える体に、ばざりとやさしく毛布をかぶせられた。サファイジャが呆然と見守る中、クアイツは整った腹筋の下を覆う脚衣おびを脱いだ。

硬く立ち上がったモノが現れる。それは、うるわしの王太子にはまったくそぐわない卑猥ひわいさだった。

同じ毛布にくるまりながら、クアイツは冷えきった手でサファイジャの頬に触れた。顔を真正面に向けさせ、ひたいをこつんと合わせて、好きです、と甘くささやく。

「私のただひとりの妻になってください」

緋色ひじよの瞳に見つめられて、サファイジャは動けなくなった。

ただ心臓だけがドキドキと鳴っている。痛いくらいに胸を焦げつかせるのが、恐怖なのか歓喜なのか、悲しさなのか憧れなのか、自分でももう分からない。

くちづけられて、自然とまぶたが下りる。

仰向けに押しつぶされて息もできない。

突然、下腹部にひどい痛みが走った。何かが無理にひだを割り広げながら入ってきた。

「……、狭い」

薄膜が侵入を必死に拒んでいるのが分かる。

「い、た……っ！ 痛、痛いって……！」

思わず声が出てしまった。硬い胸板を必死に押し返すが、びくともしない。

「……少し、入りました。けど……いくらなんでも、こんな……」

クアイツが布団を撥ねはのけて、足の付け根を凝視する。耐えがたいはずかしめだ。彼の言うとおりに、付け根の間に先端がまるごと呑み込まれていた。痛みで目の前がくらくらする。

「あなたは……その、『白い結婚』をされていたのですか……？ いや、まさか……まだ婚姻前……？」

つまり処女かと聞いているのだ。

そのとおりでよばか野郎！

「だから、体だけはやれな……あげられませんが、申しました、のに……」

息がうまくできない。きれぎれに言うと、彼は今日見せた中で一番妖艶ようえんな笑みを浮か

べ、頬にキスをしてきた。

何度も何度もくちづけを繰り返しながら、熱のこもった目で見つめてくる。

「やはりあなたは私の運命の人だ……」

私の命運は今日で尽きたけどな！

もう開き直つてののしつてやろうかとも思ったが、痛みでもうろうとして、うまく声が出なかった。

中斷していた城門破りが再開された。奥までギチリと満たされて、別の苦痛で涙が浮いた。

目の前にあるクアイツの美しい顔が苦悶にゆがむ。痛いのはこっちだつての。

「きれいで凛としていて……私に媚びないあなたも魅力的でしたが、苦しそうなあなたにもそそられます」

奥深くまでもぐりこんだ塊がヌルリと引き抜かれる。

中のひだがこすれて、背中がのけぞつた。溶けてしまいそうなほど気持ちいい。

……違う、気持ちよくなんてない。

必死に体をそらして快感から逃げようとしたが、ふたたび深く刺し貫かれて声が漏れた。

「あああつ……!! ん、んん、……ああつ……!!」

ゆつくりとゆさぶられる感覚がたまらない。

痛みとしびれがツキツキと入り口のあたりをさいなんだ。慣れるにつれて快感が体の奥からわいてきて、苦痛が真っ白に塗りつぶされる。

苦しいはずなのに、蜜のような甘さがおなかの奥にたまり始めた。それが背骨をとろかし、ひどいめまいを起こさせる。

指とは比べものにならない重量に圧迫されて、ひだのあちこちが引き伸ばされる。ジュブジュブと耳をふさぎたくなるような音がした。

とても受け入れられないほどの大きさのそれが中を行き来するたびに体がぐねり、唇がだらしなく開いてしまう。

「お辛くはないですか」

「……つつら、い……」

と言いつつも、快感が抑えられない。

様子をおうかがうように浅い出し入れを繰り返していたクアイツが笑みをこぼす。かすむ視界の中で、その笑顔はやけにきらきらして見えた。

「すみません、笑つたりして。でも、嬉しくてたまらないのです。これでもうあなたは